

# 鳥取県における観光施設のあり方

## ～ 持続可能なヘルス・ツーリズムの提案 ～

研究員 建井 順子

### 1. はじめに

温泉は昔から健康と深いつながりを持ってきた。温泉地の多くが保養地、静養地として発展してきたが、戦後の大衆観光化の流れに乗って豪華な観光関連施設が増設されるにともない次第に娯楽的機能が強まり、保養地としての意味合いが薄れてしまったところが少なくない。1980年代後半から1990年代半ば頃まで続いたリゾート開発も、ヨーロッパで発祥し「保養や休養およびレクリエーションやレジャーを目的に人々がしばしば訪れるところ（佐藤1990, p28）」という意味を持つリゾートを日本につくるという構想自体には何ら問題はなかった。むしろリゾートという概念を取違えたところに、土地投機・村おこしなど様々な立場の利害関係者の思惑が錯綜し、結果としてヨーロッパのリゾートとは似ても似つかない日本型リゾートというものができあがってしまったこと、そしてそのことが自然環境・景観に深刻な影響を与えるとともに地域の固有性を奪い取ってしまったことが致命的な問題であった。

他方で現在の日本を見ると、「癒し」という言葉がメディア、観光パンフレット等に頻繁に使用され、東京では各遊園地に日帰り温泉ができるなど「癒し」をテーマとしたレジャー・観光商品に人気が集まっている。これは、急激な社会環境の変化にともない人々は元来の人間性を取り戻したいと願っており、その手段としての「癒し」が必要不可欠なものとなっていることと関連している。同時に、高齢化が進むにつれ老後を健康に過ごし生活の

質（QOL）を保持したいという願望が国民の中にも強く芽生えてきている。以上のような心と身体両方の健康志向の高まりをうけ、温泉回帰を中心に、健康を目的とした観光である「ヘルス・ツーリズム」が注目を浴びてきている。

本稿では、このように国民の健康への関心が高まる中、質の高い温泉を持つ鳥取県はヘルス・ツーリズムの潜在的な可能性を持っているものの、実際に実行に移すにはいくつかの留意点があることを論じようとしている。

### 2. 「ヘルス・ツーリズム」の定義と観光学に

における「ヘルス・ツーリズム」の位置づけ  
観光学において「ヘルス・ツーリズム」という言葉が使用されるようになったのは、1970年代に入ってからである。日本の著述として初めてこの分野について論文としてまとめた姜によると、ヘルス・ツーリズムは「健康の回復・維持を目的として、さまざまな自然資源を利用するとともに、健康に関連した施設・サービスを活用したもの（姜2003, p41）」と定義される。さらに、経済学者であり起業家でもあるピルツァーは「ヘルスケア」という言葉には特定の症状や疾病に見舞われたり、身体に何らかの反応が現れたときに、病気の症状を治療したり、病気を退治しようとする「疾病」対策と、健康な人がより健康であるため、また老化を遅らせたり、病気自体を予防したりする「ウェルネス」対策とが内包されていると指摘している（ピルツァー2003, p16～17）が、ここで「ヘルス・ツーリズム」

という時の「ヘルス」は両者を内包した形で使用されているようである。

ここで観光学の系譜を概観すると、現在の主流は「サステナブル・ツーリズム（持続可能な観光）」である。この「サステナブル・ツーリズム」は戦後世界中で観光が大衆（「マス・ツーリズム」）化し、大勢の観光客が観光地に押し寄せてきたことにより収容能力を超えた現地観光地における環境面等での悪影響が顕著化したことから、その反省を踏まえて出てきた概念である。142カ国が加盟し、観光分野における世界最大の国際機関である世界観光機関（World Tourism Organization〔WTO〕）の定義によると、「持続可能な観光開発とは、次世代のための機会を保護、強化し、現在の旅行者とホスト地域の需要に合ったものである。あらゆる資源を次のような方法で活用・管理することを想定している。つまり、文化の品位、必要不可欠な生態学的プロセス、生物学的多様性と生命維持体系を維持しつつ、経済的、社会的、審美的な需要を満たす方法である。（WTO <http://www.world-tourism.org/>）」となっている。

「ヘルス・ツーリズム」は、マス・ツーリズムに代わる新しい観光形態の一つとして生じてきた「サステナブル・ツーリズム」とは別の系譜から生じてきたものである。しかし時代の流れを考慮に入れると双方が矛盾したツーリズムのあり方は考えられず、「サステナブル・ツーリズム」を満たした「ヘルス・ツーリズム」でなければ、今日あるべきツーリズムの形態として望ましいものとは言えないであろう。

### 3. 健康への関心の高まりと癒しを求める人の増加

アサヒビールお客様生活文化研究所が首都圏の男女1,000名にインターネットで調査を行った「食と健康のセンサス」が2001年度分から2003年度分までウェブ上で公開されてお

り、これを見ると国民の健康に対する意識が浮き彫りになる。

まず、「健康に関心があるか」との問いに対し、約9割の人が関心があると答えている。年齢別に見ると、男女とも45歳を境に健康への関心が高まっている。しかし、「健康」の定義の捉え方は年代、性別により様々であり、同研究所は、これを「健康意識・行動」に基づいて7つのタイプに類型化している。それによると、健康に関心が高く、実践においても健康的な生活を行っているのは、同研究所が名付けるところの「健康ナルシス実践おばさん（構成比15.4%、男女50代が多い）」と「こつこつ健康おじさん（構成比15.1%、50代～60代の既婚者、女性は専業主婦が中心、男性は定年を間近に迎える管理職・経営者・役員が主）」である。特に「健康ナルシス実践おばさん」と名付けられた層は、「中高年の女性が多く、容姿・健康・食事・運動・情報享受など、健康に関するあらゆる行動について非常に積極的」で、「家族や友達にも健康法や食べ物についての情報を伝授している情報のリーダー」的存在である。また、ジムへの投資、健康食品の購入など「現状の自分の健康・体力に自信があり、それを維持するための労力や出費を惜しまない」など、最も健康に関心を持ち、それとともに健康に良いことを実践している層であると考えられる。

次に、健康に関心のある人は9割に上るとの結果が出た反面、「食事の時間帯」に関する質問で、午後10時以降に食事をしている人の割合が27%と前年及び前前年（それぞれ19%と16%）から増加しており、人々が健康に関心を持っていながら日常の生活においては不健康な生活を送らざるを得ないという矛盾が浮き彫りになる。これからも、健康的な活動及び商品への需要が潜在的に年々高まってきたことが推測できる。

また、内閣府による平成14年度国民生活に関する世論調査によると、心の豊かさや物の

豊かさのどちらを重視するかとの質問に対して、「心の豊かさ」を望む人の割合が60.0%、「物の豊かさ」を望む人の割合が28.7%となっている。ここで「心の豊かさ」を「癒し」と直接結びつけることはやや強引かもしれないが、人が何らかの手段により心が豊かになったと感じればそのような状態は「癒された状態」であるといえるだろう。生活程度との関連で見ると、世代及び性別により生活程度の影響を受けて答えが異なってくる点は考慮に入れなくてはならないが、少なくとも日本人の6割は「癒し」を希求しているといえる。

#### 4. 代替医療への関心の高まり

人々の健康への関心が高まる一方で、現代西洋医学（以後現代医学）以外の医療法である代替医療への関心と需要も高まっている。代替医療は英語で Alternative Medicine あるいは Complementary Medicine と呼ばれ、現代医学以外のもの全てを指す。そのため、中国医学のような「伝統的医療」、カイロプラクティックのような「現代医学に対して新しい医療として出てきたもの」、ヨーガ、温泉療法等の「心理療法」、その他「食事療法」や「健康食品療法」など現代医学以外のありとあらゆる療法がこのカテゴリーの中に含まれており、非科学的なものから有効性が科学的に証明されているものまで混在する状態となっている。

米国においては1992年から米国医療の中心機関であるNIH（米国国立保健研究所）に「代替医療研究室」が設置され、現在ではハーバード大学を始めとして「代替医療センター」を持つ医学部が20校以上あり、診察・教育研究を行っている。また、代替医療が普及している英国においては、1991年から英国厚生省により開業医が自分のクリニックにおいて代替医療の治療家を雇用すること、およびその治療費への国の健康保険の適用を認められている。また学問においても、代替医療を、医

学部とは別の学部あるいは学科の中に持っている国立大学も少なくない。このような流れの背景として、より自然に近い形での治療を求める人が増加したこと、医療費が安くて済むこと、がん、生活習慣病等の現代医学だけでは完全な治癒が困難な病気や精神的な病気に対しては代替医療が効果的な場合があること等があげられる。米国と英国におけるこのような動きは、医療の流れが現代医学と代替医療の双方の利点を取り入れた「統合医学」の方向へ向かっていることを示している。

日本においてはごく一部の国家試験を除いて、現代医学の理論にもとづくことのないさまざまな治療法は法律や規制による制度化・保護が行われていないのが現状である。その点では欧米に遅れをとっていると言わざるを得ないが、自己治癒力を高める手段の一つとして代替医療を取り入れる病院も少しずつ増えてきているようである。

また最近では、足裏へのマッサージを行うことにより体調を整えるリフレクソロジー、香りによって爽快感をもたらすアロマテラピー等の心理療法、日本に昔からあり世界的にも受け入れられている指圧マッサージ等の用手療法などは、医療機関とは別の専門サロンが増加するに伴い働く女性を中心に人気を集めており、法的な整備を待たずに実需を反映して、海外の資格取得者たちを中心に供給側も急激に増加しているようである。

#### 5. 海外事例：チバソム・インターナショナル・ヘルス・リゾート

以上のように、昨今の健康・癒し・代替医療への関心の高まりを受け、それらに関連したサービスに対する需要も急速に高まっているが、残念ながら日本ではそのような需要を総合的に満たす滞在型の施設はほとんどない。しかし、海外に目を移すとそのような施設は存在している。特に東南アジアのタイには毎

年多くの日本人が健康・癒し・代替医療サービスを求めて旅行をする。実際、タイ政府の発表によると、2002年にタイで医療サービスを受けた約60万人の外国人のうち日本人が13万人でトップを占めており、外貨収入も約3.8億米ドルに達している<sup>(1)</sup>。

ここでは、多くの日本人の人気を得ているタイのリゾートの中でも2002年に CondeNast社（米国・ヨーロッパにおける出版大手）の主に英国を中心としたヨーロッパ圏の読者を対象とした観光関連雑誌「トラベラーUK」<sup>(2)</sup>による読者アンケートで、世界ベスト・ホテル100の中から一位（ベスト・スパ部門）に選ばれた「チバソム・インターナショナル・ヘルス・リゾート（以後チバソム）」を紹介する。

#### （１）場所

タイのバンコクから車で約3時間（約210km）南方へ下ったタイ最古のリゾート地ホアヒンにあり、チバソムとは日本語で「安らぎの隠れ家」を意味する。7エーカー（約8,400坪）の熱帯の緑が青々と茂る敷地に、ひっそりと伝統的タイ様式の建物が佇んでおり、一部は海岸に面している。

#### （２）設立の背景

ブーンチュ・ロジャナスティン元副首相がタイのビジネス界の協力を得て2600万米ドルを投資し、9年前にアジアで最初のスパリゾートとして創設された。リゾート施設という枠にとらわれず、心と身体が一体となってバランスの良い調和が得られるようにより広い視野に立ち、滞在中に即効的な効果を得る、

滞後もその効果を毎日のライフスタイルに取り入れて生かしていくことを学ぶ、滞在を心行くまで楽しむ、という3点を目的としたサービスを提供している。

#### （３）施設

部屋数は全57室のみ。トリートメントルームやマッサージルームをはじめヨガ・太極拳を行うパビリオン、ジム、エクササイズスタ

ジオ、屋内プールなど各種プログラムが実施できる施設が整っている。

#### （４）プログラム

伝統的な東洋医学と西洋医学の双方の利点にもとづき、治療よりも予防と身体の自己治癒力に力を入れている。すべてのゲストはホテル到着後に健康診断を受け、カウンセリングにより個々の目的に添った治療（マッサージ等のストレス解消・緊張緩和を中心とした療法。約80種類の中から選択）や活動（太極拳、ヨガ、ストレッチ、エアロビクス等のより運動性の高いもの）スケジュールを決定する。医者、看護師、プログラムコンサルタント、栄養士、フィットネススタッフなどの多種多様なスペシャリストが個人にあったアドバイスを必要に応じて行う。プログラムの多くはリラックス、フィットネス、体重管理、リハビリや軽い症状の病気、ストレス関連の病気に効果がある。

#### （５）食事

食事のメニューすべてに栄養表示がついており、食事の習慣を改善したい人には栄養学的な分析も行う。新鮮な材料を使用し、メニューはすべて低脂肪・低カロリーで、小麦、乳製品、砂糖は使用されておらず、野菜類を中心とした素材を生かした味付けとなっている。ちなみに、ここで提供される果物と野菜は自営の農園でつくられたものである。

#### （６）健康に滞在するための規制

より健康的な生活を保つため、規定の場所以外での喫煙禁止、携帯電話禁止、16歳以下の子供禁止、アルコールは夕食時のワインのみ等の厳しい規制も設けられている。

#### （７）国際水準の専門家の採用・育成

長期的な成功は質の高い専門家次第であるとの考えにもとづき、チバソムでは特に美容関係の専門家育成を目的とした自前の専門学校を持っている。同校は英国の BABTAC（英国美容療法・美容術協会）の教育機関である CIBTAC 認定校となっており、卒業後

には CIBTAC から修了証書を得ることができる。

タイのタクシン首相は来日した際に、2004年度から同国をアジアの健康サービスセンターとしていきたいとの発言を行っている<sup>(3)</sup>が、このような発言の背景として、健康への関心が世界中で高まっていること、およびチバソムのようなヘルス・リゾートの実践において同国が実績を上げていること等が挙げられる。ちなみに、チバソムにはリゾートという名称がついているが、既に述べてきたように日本型リゾート施設とは全く異なるものであることを強調しておかなければならない。これは、同施設が CondeNast 社の読者投票において「雰囲気」、「環境への配慮」、「サービス/スタッフ」、「宿泊設備」、「金額に見合う価値」、「設備」、「待遇」、「食事/レストラン」等の判定基準にもとづいて評価されていることから理解できよう。

## 6. 他県の事例

日本においてチバソムのような雰囲気、機能の両面を兼ね備えた滞在型健康施設はまだまだ少ない。しかし、健康志向の高まりに注目し、健康を観光に取り入れた観光プログラムづくりを始めている地域もある。

長野県は日本一の長寿県で、しかも老人医療費は全国最低である。その中でも鹿教湯（かけゆ）温泉は20年前から地域ぐるみで健康づくり運動普及組織「鹿教湯温泉健康保養協会」を発足させ「健康の郷」づくりを行っている。同協会は鹿教湯病院、鹿教湯温泉観光協会、旅館組合、商工会など温泉にかかわる多くの団体から組織されており、栄養、運動、休養などの健康増進に関する基本知識の普及に実績を上げてきた。また、クアハウス等の温泉を利用した健康施設やシステムの先駆的提案・普及運動、最近では、身近な自然を探索し、埋もれている歴史的遺産、峠の道標や道祖神などを楽しみつつ健康増進をはか

る「里山歩き」も行われている。

温泉地以外でも新潟県大和町「健康やまとぴあ」のような滞在型人間ドックを提供するところもある。「健康やまとぴあ」は、都会の人々に「健康」と「ふるさと」を提供することを目的に大和町が企画した滞在型人間ドックである。温泉に2泊3日滞在し、1日目に健康体操または創作等の実習、2日目は町立雪国大和総合病院にて人間ドックを中心に生活栄養相談等、3日目はオプションツアー「ふるさと体験」として「山菜採りにそば打ち」、「尾瀬沼散策」等が用意されている。また、宿泊先となる旅館では、地元の素材を生かした「やまとぴあ料理」を楽しむことができる。2003年度の場合、5月～10月の期間限定で4回のコース中から選択する形となっている。

また、北海道のようにメディカルチェックなどの健康分野と、温泉や陶芸体験などの観光分野を組み合わせた「健康保養型ロングステイ観光ツアー実証実験」を試行したり、沖縄県のように暖かい気候や、健康や長寿に適した食事、運動、休養に、楽しみとしての周遊を加えた「沖縄版健康保養型観光」のモデルツアーづくりを行ったりするところも現れてきている<sup>(4)</sup>。ただし、現在のところ日本における滞在プログラムは、心の健康よりもむしろ人間ドック・健康チェックという身体の健康予防的なものが主となっており、これに地元の食事や周辺観光を結びつけたものが多いようである。

## 7. 鳥取県における「ヘルス・ツーリズム」の可能性

ここではチバソムを参考としつつ、鳥取県の温泉地域一体を一つのリゾートと考え、既存の施設を最大限に利用することにより鳥取県版滞在型健康プログラムを提供することを考える。ここで、鳥取県がチバソムから参考にできるのは次のような点と思われる。通

常の運動プログラムと代替医療による治療プログラムの組合せによる心と身体の調和のとれた体づくりの提供。有機野菜・果物を使用した低カロリー・低脂肪食の提供。自然との一体感を感じることでできる景観・環境づくり。国際水準の専門家スタッフの雇用及び育成。以下はそのような点を踏まえながらより鳥取県の現実に即した鳥取県版ヘルス・リゾートづくりを考え、その際に必要となるいくつかの要素を羅列する。

#### (1) 温泉

日本において温泉は昔から治癒・療養目的で使用されてきたという歴史を持っている。その点で鳥取県には主なもので10の温泉が存在し、その中でも特に三朝には国立大学で唯一の温泉の研究機関である岡山大学医学部・歯学部附属病院三朝医療センターがあり、複合温泉療法（リウマチ温泉療法及び喘息温泉療法）により治療を行っている病院としてその名を知られている。通常の観光客がそのようなセンターを利用することは無理であるとしても、ウェルネスに興味のある人にとって「ラジウム」が含まれた温泉を利用した滞在型健康プログラムに対する需要は大きいと思われる。また、その他の温泉地においても各温泉の泉質・効能を生かして、健康プログラムのメニューの一つとして提供することができる。

#### (2) 施設

チバソム設立に際しては、タイ元副首相自身のビジネス界とのつながりを利用して2600万米ドルもの投資が行われたが、もちろん鳥取県でこのような投資は現実的ではないし、仮に実現可能であっても行うべきではないと考える。鳥取県には昔から温泉街として栄えてきた地域がいくつか存在しているのであるから、これを使わない手はないだろう。但し、これらの温泉街を壊そうというのではなく、むしろ地域内の協力体制を必要とする。例えば、全国2,000余の温泉地を対象に、大手旅

行業者をはじめとする“旅のプロ”が投票する第17回にっぽんの温泉100選<sup>5)</sup>で4位となった熊本県の黒川温泉は、同地域内の露天風呂に3ヶ所まで入浴できる入湯手形を発行し、他の旅館の温泉も気軽に使用できることで好評を得ている。これにより旅行者は温泉を渡り歩くことができ、十分に温泉を楽しむために一人当たりの現地滞在日数も延びることになる。鳥取県においても、例えば旅館で温泉と低カロリー食を提供し、その他のプログラムには地域内共有の施設を使用することが考えられる。また、観光客は滞在期間中に地域内であればどの温泉・食事亭でも利用可能としておく等、観光客に自由度を持たせることも一案であろう。このように地域ぐるみでサービスを提供しながら、売り上げに応じて足りないものを少しずつ整備・増設していくのがよいだろう。

#### (3) 食材

チバソムは自営の農園から野菜と果物を調達しているが、これも鳥取県には農家が多いことを考えれば同様なことは可能である。既に施設のところで述べたように、地域全体を一つのヘルス・リゾートと考えれば、周辺の農家と提携することによって地元の新鮮な食材を使用した低脂肪・低カロリー食を提供することができるだろう。無農薬食材であればさらに健康志向の人々には喜ばれる。また、このように地元の食材を使用することは県内でも提唱されている「地産地消」の流れに即したものとなる。

#### (4) 人材

専門家の指導の下でプログラムを実行することにより、より効果的で信頼感のある健康プログラムを提供することができる。そしてそのような専門的なアドバイスを与える理学療法士、スポーツ・インストラクター等各種専門家が常駐して必要に応じて観光客にアドバイスできることが望ましい。また低カロリー食を指導する管理栄養士も必要である。将来

的にはチバソムのように地域で自前の専門養成校をつくるなり、近くの大学と提携して人材育成を行うことができるようになれば、同校の卒業生をそのまま健康プログラム実施地域に専門家として採用することができ、地元の雇用創出にもつながる。

#### (5) 景観・環境

健康と自然環境とは切っても切れない関係にある。例えば、先述の黒川温泉は自然との一体感を感じさせるつくりの温泉郷である。同温泉郷は、他の温泉街が温泉とは無関係な店舗や装飾で歓楽街的雰囲気を作り出しているのとは対照的に、田舎のよさ、山間の自然を活かし周辺の風景と調和がとれた温泉街づくりにはげんだ。そしてそのことが黒川温泉を全国から観光客を集めるほどの人気のある温泉にした理由ではないかと船井総合研究所<sup>(6)</sup>が分析しているように、健康・癒し・代替医療を求めてくる観光客が望むものは歓楽街ではなく自然との一体感である。

#### (6) 住民参加型

地域を一つのリゾートとして考えるのであるから、まずは地域がどのような方向に向かっていくかという指針を住民間で徹底的に議論することが最も重要なことである。つまり、住民自身が観光客となって健康・癒し・代替医療サービスを受けるとしたらどのようなものを望むかということが話し合われる必要がある。東京や大阪から観光客を呼ぶことも大切ではあるが、地域に住む住民が行きたいと思う観光地をつくりあげることが、結果として他県からの観光客に気に入ってもらえる観光地をつくることになる。地域一体型健康施設の計画から運営に至るまでの全てが住民主導であることで地域住民の真剣さも違ってくるであろうと思われる。ただし、担当責任者は、権限を持つと同時にリスクも負うことは言うまでもない。

#### 8. おわりに

今まで温泉地での保養・療養というと病気の治療などを連想させ、なんとなく暗い印象を与えることもあった。しかしこれからは、保養よりもよりよい健康状態を目指すウェルネスのための一手段として温泉地を考える必要がある。そのような観点から、チバソムの例は心と身体の調和を目指した健康プログラムづくり、環境負荷をなるべく少なくした施設づくり、および人々に快適さを与える雰囲気づくりに成功した例として今後の鳥取県にとっても参考になるであろう。ただし、豪華な施設を建てることによって観光客を呼ぶ日本型リゾート的観光は時代の流れのみならず鳥取県の風土にもそぐわないことは既に歴史が教えてくれているとおりである。本稿で紹介した国内事例も、観光地の本来の資源を再検討して活用したものであり、鳥取県で同様なプログラムを推進する際にも学ぶべき点である。既に述べたように、重要なのは施設というハード面ではなく、高い専門性を持つ人材、施設の機能性・快適性、金額に見合った価値、適切なサービス等のソフト面であり、それらにおいて高度なものが提供できれば、その他は多少の整備とともに鳥取県の既存の施設を活用することにより十分対応可能であると考えられる。そしてこのような取り組みを現在日本各地で盛んに取り組まれている住民参加型のまちづくりの動きと連動して行えば、より住民の意思が反映された鳥取県独自のヘルス・リゾートをつくりあげることができるであろう。

#### 注

- (1) 『週刊観光経済新聞』2004年1月17日
- (2) 英国は国際観光支出において世界で米国、ドイツに次ぐ第3位（J N T O 国際観光白書2003年度版）となっており、その意味においても英国を中心に読まれている同誌の読者による投票の結果

は興味深い。

- ( 3 ) 『週刊観光経済新聞』 2004年 1月17日
- ( 4 ) 『週刊観光経済新聞』 2004年 1月17日
- ( 5 ) 『観光経済新聞』 ( [http://www.kankoukeizai-shinbun.co.jp/html/onsen\\_best100\\_top.htm](http://www.kankoukeizai-shinbun.co.jp/html/onsen_best100_top.htm) )
- ( 6 ) 『週刊まちおこし』 第10号2002年 6月 4日

#### 参考資料>

- 1 . アサヒビールお客様生活文化研究所 : 『食と健康のセンサス』 ( <http://www.abyc.co.jp/kyakuken> )
- 2 . 上野圭一 ( 2002 ) : 『代替医療 - オルタナティブ・メディシンの可能性』 角川書店
- 3 . 帯津良一 ( 監修 ) 上野圭一・CAMUNET ( 著 ) ( 1998 ) : 『いまなぜ「代替医療」なのか～治癒系を活かすヒーリングアート～』 徳間書店
- 4 . 鹿教湯温泉 : ( <http://www.kakeyu.or.jp/index2.html> ) 及び健康と温泉フォーラム : ( <http://www.onsen-forum.co.jp/workshop/forum-report/forum99/hyouji.html> )
- 5 . 『週刊観光経済新聞』
- 6 . 『観光経済新聞』 : ( <http://www.kankoukeizai-shinbun.co.jp/> )
- 7 . 姜淑瑛 ( 2003 ) : 「ヘルス・ツーリズムの現状と課題」 ( 前田勇編 『21世紀の観光学』 学文社 )
- 8 . Conde Nast Traveller UK : ( <http://www.cntraveller.com> )
- 9 . 佐藤 誠 ( 1990 ) : 『リゾート列島』 岩波新書
- 10 . 世界観光機関 ( WTO ) : ( <http://www.world-tourism.org/> )
- 11 . ChivaSom : ( <http://www.chivasom.com/main.asp> ) 及び ChivaSom 提供資料
- 12 . 獨協医科大学 : ( <http://www.dokkyomed.ac.jp/dep-k/cli-lab/simin/66daigae.html> )
- 13 . 内閣府 : 『平成14年度国民生活に関する

世論調査』 ( <http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-life> )

- 14 . 新潟県大和町健康やまとぴあ : ( <http://www.town.yamato.niigata.jp/yamatopia.htm> )
- 15 . 船井総合研究所 : 『週刊まちおこし』 4/<http://machiokoshi.net/index.htm> )
- 16 . ポール・ザイン・ピルツァー ( 2003 ) : 『健康ビジネスで成功を手にする方法』 英知出版
- 17 . J N T O 国際観光白書2003年度版